

# ジェネリックスキルの教育効果を高める実践力養成型 インターンシップに関する一考察

島 一樹<sup>1)</sup>, 川崎克寛<sup>2)</sup>

1) 徳島大学総合教育センター キャリア支援部門, 2) 徳島大学 COC プラス推進本部

## 1. はじめに

近年、インターンシップ（以降、ISP と略す）は量的に拡大している一方で、質的には就業体験により教育効果を高めることが促されているものの望まれる結果が得られてない傾向にある。具体的には1 Day などの短期 ISP では時間的制約から“体験型”というよりも“見学型”となり教育効果が低い。また、中長期 ISP では“体験型”ではあるが、企業側が独自に ISP プログラムを構成し、学生の何を養成するのかという大学側の教育観点が十分に反映されず、学生にとってはアウトプット（成果物）を得る達成感はあるが、何が養成されたのかというアウトカム（教育効果）が漠然としている傾向がある。さらに、企業側は社会貢献などが主目的となり、企業自体の実施効果が低い傾向にある。このような背景の中で、産学が連携しながら ISP プログラムの構成に取組み、学生が社会で活躍する人材になるための実践力を養成すると同時に、企業は自社の経営課題の解決に取組むといった双方が実施効果を楽しむ“実践力養成型 ISP”を実現するためにプログラムの質を改善する課題が挙げられる。

本研究では、上記課題の解決策として“実践力養成型 ISP”プログラムの構成および実施において産学が連携し、互いに ISP の実施効果を楽しむために、プログラム構成における工夫とその実施効果の検証について報告する。

## 2. 実践力養成型 ISP の事業概要

- (1) 事業名：2017 年度 COC プラス事業
- (2) 実施期間：6 ヶ月（2017 年 7 月～12 月）
- (3) 実施体系：図 1 に企業と大学が連携し ISP を実施するための組織体系を示す。組織構成については、①企業：15 社、②大学：コーディネータ

ー2名/学内メンター15名（1プロジェクトにつき1～2名）/学生54名（うち1年生5名、2年生17名、3年生27名、4年生5名）である。

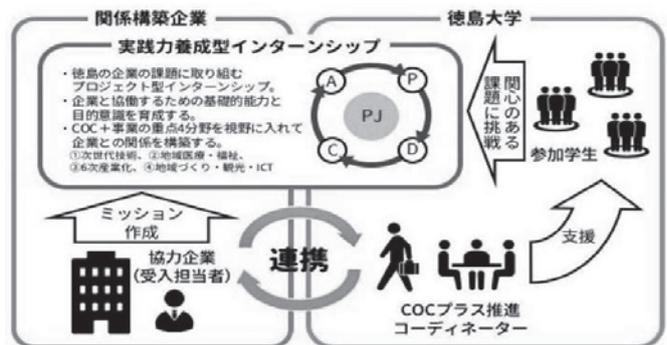


図1 実践力養成型 ISP の組織体系

## 3. 実践力養成型 ISP のプログラム組成

### (1) ISP プログラムの組成

ISP プログラムは、企業（経営者および受入担当者）とコーディネーターが協議のうえ組成を行った。ここに、取組み課題は受入担当者が学生に仕事を一方的に与え、かつ指導する“ピラミッド型チーム”ではなく、あらかじめ決まった課題解決がない前提でプログラムに関わる者すべてが互いに協働しながら課題解決に取り組める“水平チーム”をイメージした。このようなプロセスを乗り越えることで、学生は学内で知識を学ぶという段階（“分かっている状態”）で留まるのではなく、学内では創出できない適度な負荷を受ける就業体験を通じて、社会における実践力（“できる状態”）を養成することが可能となると考えられる。

### (2) 取組み課題の選定

具体的な取組み課題については、企業と学生が互いに ISP の実施効果を楽しむために、企業の実務レベルの課題に取り組むことを前提とした。具体的には図2に示すように、企業の取組み課題を“緊急”と“重要”の2つの要素の有無で区分さ

れた4つの事象のうち、“緊急ではない”かつ“重要である”に相当する経営課題に直結し、その課題解決が企業の益になるものとし、企業と学生の知識・能力・スキルなどを融合的に活用することで実施効果を高めるように選定した。

	重要である	重要ではない
緊急である	主体:社員 日常業務として、マニュアル化・体系化されている仕事。	主体:アルバイト/パート アルバイトやパートで十分できる仕事。
緊急ではない	主体:経営者:幹部 経営課題。会社が次の展開へと進むために必要が仕事。	業務の見直しが必要な仕事。 (ベンチャーにつながる要素が埋もれている可能性あり)

図2 ISPの取組み課題の選定

#### 4. 教育効果の検証手法および測定結果

学生の教育効果の検証手法としては、ジェネリックスキル測定一般的な手法であるPROG検査を活用し、ISPの事前(1回目:7月)と事後(2回目:1月)に、①COCプラス事業に参加している1・2年生(19名)、②同事業に参加している3・4年生(24名)、③同事業に不参加で専門科目(選択科目)の短期ISPに参加している3・4年生(18名)を対象に7段階で判定されるジェネリックスキルのレベルを測定した。

図3にPROG検査の測定結果を示す。この測定結果はジェネリックスキルの2つの指標(リテラシーとコンピテンシー)のうち、コンピテンシーの結果で、凡例CaseA~Cの属性毎の判定レベルの平均値を示している。なお、本紙では代表的なものを示すが、その他の結果についてはカンファレンス当日にて発表する。

#### 4. 分析および考察

図3の測定結果からの分析および考察について以下に述べる。

(1) CaseA・BとCaseCの判定レベルを比較して、COC事業に参加している学生の方が、1回目の測定結果でレベル格差が1以上ある。以上から、もともとコンピテンシーの判定レベルが高い学生

が実践力養成型ISPに参加する傾向がある。これは実践力を養成する上で、チャレンジ精神という動機に加え、自分自身の能力・スキルの程度を判断基準に参加している可能性が考えられる。

(2) CaseA~Cの判定レベルの伸長幅がそれぞれ0.27, 0.41および0.30であり、1・2年生より3・4年生の伸長幅が0.1ポイント以上高い。以上から、水平チームを目指す中で、上級生の方が暗黙的にリーダー的になるなど負荷が高かったことが一因ではないかと考えられる。一方で、短期ISPと長期ISPである本事業との伸長差はあまりないが、判定レベルの難度の違いに注目すれば、伸長幅以上の教育効果が得られたと考えられる。

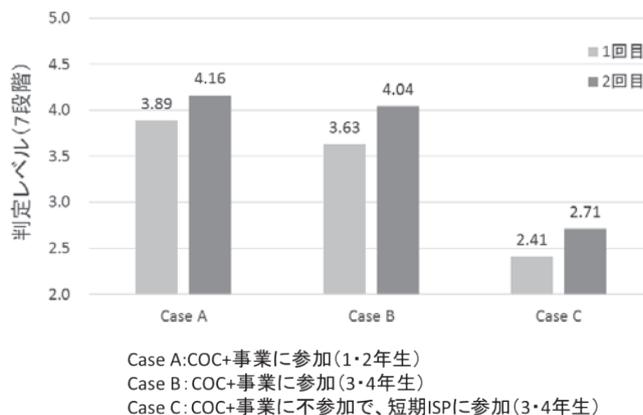


図3 PROG検査結果 (コンピテンシー)

#### 5. 今後の展望と課題

今後の展望としては、本事業の教育効果をより高めることができる可能性があるということである。そのための課題としては、長期で臨むスタイルであるために、学生のモチベーションが一時的に低下することがあったこと。また、企業側としても学生と共に課題解決に取り組むスタイルが初めてのことであり試行錯誤的になったことなどが挙げられる。来年度に向けて、学生に対しては更なる教育効果の向上を目指して、学生のマインドセットより良くする事前学習や長期で実践するなかでの中だるみを解消するためにモニタリングをより充実したい。企業側に対しては、雇用機会の創出、社員の育成などにも効果は現れてきているが、実践力養成型ISPを定着させることで受入効果の更なる向上を目指したい。